

「武井実良の夢」 武井悦子

ただいまご紹介に預かりました、武井悦子と申します。  
この度はブラインドテニス国際会議の初開催、誠におめでとうございます。  
心よりお喜び申し上げます。  
このような晴れがましい席にお招き頂き感謝申し上げます。

本来ならブラインドテニスの創始者でもあります、わたくしの夫、武井実良が皆様の前でご説明させて頂くべきところですが、彼は一昨年の冬、不慮の事故により帰らぬ人となりました。

そのため僭越ではございますが、妻のわたくしから彼がブラインドテニスを考案し世に広めていった経過について少々お時間を頂き、お話させて頂きたいと思っております。

彼は四人兄弟の次男として生まれ、一歳で失明し視覚障害者となりました。  
しかしそのような境遇を全く気にすることなく男ばかりの兄弟の中、活発な少年時代を過ごしていました。

そんなある時、自分と兄弟たちがどこか決定的に違うことに気付く瞬間がありました。  
それはいつものように兄弟と野球をしていた時のこと。

兄弟たちはピッチャーの投げるボールを空中で容易く捉えることができるのに、いくらやっても自分はそれができない事実。

自分は目が視えないということに気付いていなかった彼は兄弟たちも自分と同じ状態だと思っていました。

そこで、その事実を知った彼はなぜ自分のバットにボールが当たらないかを理解しましたが、それを受け入れるというよりは、その立場でも同じように空中のボールを捉える方法はないかと考えるようになったそうです。

その頃、視覚障害者の球技というのはグランドボールやサウンドテーブルテニス、フロアバレーなど、音源入りのボールを転がして打ち返すスタイルのものばかりで空中でボールを捉えるスポーツはありませんでした。

それはボールが空中を跳ぶ場合、たとえ音がしても自分との距離を掴むのが難しく、打ち返すことができないと思われていたからです。

しかし、彼は「見えない空間を飛んでくるボールにありったけの力をぶつけてみたい」という思いを諦めることなく学生時代を過ごしていたそうです。

時は過ぎ、高校生になった彼は障害のあるなしに関わらず、誰もが共に楽しめるスポーツはないだろうかとより強く考えるようになり、テニスはどうだろうかと閃いたそうです。

1対1の少人数でできるスポーツであり、ボールがバウンドするたび音が鳴れば軌道を把握し、空中で捉えることができるのではないかと考えつき、試しに音源入りのボールを体育館で教師にバウンドするよう投げてもらったところ、みごと打ち返すことに成功したのです。

その瞬間、彼はテニスの虜になりました。

その日を境に仲間を集め始め、自らボールの改良、コートやルールの改善をする孤軍奮闘の日々が始まりました。

始めた頃は三次元のスポーツに批判的な意見もありましたが、次第に賛成して下さる方も増え、少しずつ広がっていったそうです。

その甲斐あって、数年後には仲間も増え、1990年10月には全国初の大会を開催できることとなりました。

その後もなお一層ブラインドテニスの発展のために尽力を続けていました。

ちょうどその頃、私と彼は巡り会い程なく結婚することとなりました。

彼と出会ったばかりの頃、私はあまりスポーツというものに興味を持っておらず、彼がブラインドテニスという新しいスポーツを趣味として楽しんでいるのだという程度の認識しか持ってはいませんでした。

そのため周囲の知人や友人から彼の身体的能力の素晴らしさをどれほど評価されてもあまりピンとこないというのが正直な気持ちでした。

ですが彼と結婚し、共に暮らすようになると今まで私が想像していた何倍、何十倍もの強く深い思いを彼がブラインドテニスというスポーツに傾け日々の時間や労力を費やしているのだということに改めて気付かされました。

その頃の彼は年中ほとんどの休日を利用し、ブラインドテニスの練習や仲間との親睦、普及活動や大会出場などで全国各地を飛び回っていました。

自分自身の考案したブラインドテニスという新しいスポーツを一人でも多くの方々に理解して頂き、一般の人々と共に楽しめるバリアフリーなスポーツとして世に紹介していました。

そして、全国的に普及活動も広がり、いずれは世界的にも認知度の高い状況が訪れることを何よりもそして誰よりも喜ばしいと強く願っていました。

ブラインドテニスの未来について語っているときの彼の口調はまるで少年のように無邪気で、いきいきと明るく喜びに満ち溢れていました。

そんな彼に接していると私まで心が豊かになり、幸せな気持ちを味わうことができました。

それでも時には私だけがポツンと取り残されているようなとても寂しい気持ちになることもありましたが、そんな時、いつも彼は静かに私の心に寄り添い優しく励ましてくれたり、労いの言葉をかけてくれたりしました。

私の感情の全てを受け止め、いつでもそっと見守り続けてくれるそんな心温かい伴侶でした。

彼を知る多くの皆様にとりまして、武井実良という人物はブラインドテニスの創始者であり、素晴らしい才能や高い身体能力の持ち主などと評価していただいているようですが、妻の私にとりましては、誰にでも優しく、平等で、フランクな性格のどこにでもいるようなごくごく普通の男性というイメージしかありません。

ただ、そんな彼が幼い頃描いた壮大な夢を現実のものとするため、たゆまぬ努力を重ね、日々、一步一步前に進もうとしていることは理解していました。

そんな姿を身近に感じながら生活する中で、私も知らず知らずのうちにその夢が無限に広がっていく光景を想像し、彼の描いた未来を応援するようになっていきました。

それではここで彼のひととなりを象徴するような幾つかのエピソードをご紹介します。

ある日いつものように私も同行し屋外のコートでテニス仲間数名と練習していたところ、隣接のコートから偶然テニスボールが転がってきました。

彼がとっさにそのボールを拾い上げ投げ返すと、不思議そうな気配。

それを察した彼はすかさず話始めました。

「僕たちは視覚障害者なのですが自分たちでもできる方法を見つけ、こうしてテニスを楽しんでいるんですよ。もしよければ体験してみませんか？」

なんのためらいもなく、自分たちが使っていた音源入りのボールを差し出しブラインドテニスについて話し始めたのです。

そのやりとりを聞いていた私は改めてブラインドテニスを一人でも多くの人に伝えようとする彼の純粋な気持ちと一途な思い、そして豪放磊落な彼の気質を誇らしく、そして頼もしくすら感じる事となりました。

またある時、脚力アップのトレーニングのためにと出場したマラソン大会の会場では、有名なランナーを探してもらい、やはりブラインドテニスのアピールをした挙句、自分が出場したブラインドテニス大会の様子が収録されたDVDを手渡すチャンスを得たのだとか。

帰宅後、その様子を楽しそうに報告してくれたこともありました。

そういえば、結婚記念日に地方都市へと小旅行に出かけた際にも、あらかじめ現地友人とアポイントを取り、ブラインドテニスのできそうな広さの体育館をおさえておいてもらい、ちゃっかりと旅行先でテニスの練習をし、その後、メンバーと親睦を深めるなどという出来事もありました。

私のことを気遣いつつも、ことテニスに対する探究心は誰よりも旺盛でいつも私はそんな純粹で一途な彼の情熱に振り回されてばかりの日々を過ごしていました。

視覚障害者であることなど、微塵も感じさせない彼の行動力に影響され、私もいつか誘われるがまま、全国各地へ出かけて行くようになっていきました。

そうして訪れた先では彼を待ち焦がれてくださっている多くの方々に驚くほどの歓迎を受け、私もその輪の中に入れていただき、素晴らしい時間を過ごすことも多くなりました。

もしも、彼と出会っていなければあのような幸せな思いに包まれながら過ごす日々など体験できなかったでしょう。

どちらかといえば、慎重で引っ込み思案な性格の私をあちこち連れ出し、多くのテニス仲間に引き合わせてくれた彼に今も心から感謝しています。

全国的な普及活動が進むにつれ、プレイヤーの数も着実に増え続け、各地で様々な大会や交流会が開催されるようになりました。

そんな状況の中、彼もまた一人のプレイヤーとしてさらに技術を高めようと日夜トレーニングに励んでいました。

自分も常に最前線で活躍し続けたいと強く願っていた彼はトッププレイヤーで有り続けるため、日々の努力を惜しまず、私などには予想もできないようなプレッシャーに打ち勝つため、自分自信とも戦っていたのかもしれない。

当時私はそんな彼の姿をただ見守り続けることしかできませんでした。

2010年の秋には全国大会の様子がネット中継されることとなりました。

それは彼にとって全国制覇7連覇をかけたとても重要な大会でもありました。

当日順調に勝ち進んだ彼ではありましたが、残念ながら決勝戦で敗退し、準優勝という結果に終わりました。

大会直後、彼は「次回は必ずリベンジしてみせる」と決意も新たに語っていたのですが、数ヶ月後、不慮の事故で帰らぬ人となりました。

彼がこの世を去った後も彼の思いは様々な形で受け継がれ、多くの方々の御協力により普及活動や大会運営が行われていると伺っています。

幼い頃抱いたささやかな夢がやがて現実の物となり、今こうして世界各国にまでブラインドテニスの輪が広がり続けている事実を誰より誇らしく、そして喜ばしく思っているのは彼自身かもしれません。

普及活動の傍ら彼はブラインドテニスに使用する音源入りのボール開発にも深く携わっていましたが、なかなか思うような品質のボールを作り出すことができず、長年試行錯誤し続けていました。

苦勞のかいあって最終的に商品化されたボールは、耐久性もありよくバウンドする理想的な仕上がりとなりました。

その試作品が完成したのは彼がこの世を去る一ヶ月ほど前の事でした。

なので私にとってそのボールは、まるで彼の残してくれた形見のような存在となりました。

ブラインドテニスが普及することで一人でも多くの視覚障害者が一般の方々と共にプレイを楽しみ、人生をより豊かに過ごすきっかけ作りのお手伝いできればと彼は心から願っていました。

志半ばでこの世を去ることとなりましたが、彼の意思は多くのプレイヤーに引継がれ、思いを絶やすことなく広がっていくことでしょう。

プレイヤーの方々には練習の時、大会でコートに立たれる時、ほんの一瞬でも彼のことを思い出し、勇気を持っていただければ幸いです。

これからプレイ人口もますます増え、パラリンピックの正式種目になるようなメジャーなスポーツになり、このブラインドテニスがますます発展していくことを心からお祈りしています。

この度はこのような晴れがましい席にお招きいただき、お話する機会を与えて下さった関係者の方々に深く感謝申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。